

2022年度 児童福祉部 事業報告



目次

はじめに	
I 認定こども園モモ 1. 振り返りから次年度の研修計画立案へ 2. 課題の振り返り ①子ども理解 ②危機管理 ③働きがいのある職場づくり 3. 支援保育 4. 子育て広場 5. 地域連携・その他	1～8
II 認定こども園ピノ 1. 2022年度の重点課題と取り組み報告 ①-1 発達の理解 -2 発達理解から子ども理解へ ②多様性を受け入れる心 2. 子育ての支援 子育て広場「ゆったりこ」 3. 自己評価と保護者アンケート	9～15
III 保育園ナナ 1. 課題の振り返り ①子ども理解のための語り合い ②園児の確保 2. 地域子育て支援	16～20
添付：各園の自己評価結果	

はじめに

児童福祉部では「学びあい、育ちあい、ひびきあう」を普遍的なテーマとし、2022年度も各園が自立しながら専門性を高め合うことを目指して、園ごとに抽出した重点課題（目標）に取り組みました。

今年度は、不適切保育や紙おむつの処理問題等、保育施設に様々な注目が集まりました。児童福祉部では、3園が質の高い教育保育を実践つづけるため、関係者評価としての保護者アンケートを実施しました。また次年度に向けて、危機対応を強化するためのマニュアル整備等、運営基盤の強化に取り組んでいます。

事業報告では、今年度の重点課題に基づく3園の取り組み結果と分析、および各園で実施した自己評価を添付しました。結果を踏まえて改善を図り、今後も質の高い教育・保育、職場環境づくり、地域貢献に努めてまいります。

自己評価の目的

- (1) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領を理解し、子どもの最善の利益を実現するために評価を行います。
- (2) 現在行っている教育・保育を様々な観点から見直す手段とします。
- (3) 現状を把握し、次の手立てを考え、実行につなげます。
- (4) 一つ一つの項目の意味を自園の立場から理解し、問い直し、更なる教育・保育・子育て支援等の質の向上につなげます。

I 認定こども園モモ

乳幼児期の子どもは、生活や遊びを通して学んでいきます。実体験がとても大切です。

モモでは3歳以上は異年齢でクラスが編成されます。生活や遊びが子ども間で伝承されていく過程の中に大きな学びがあるからです。遊びは大事な文化です。文化は継承されていきます。ただ玩具や物を置いておくだけでは、遊びが学びに繋がることもありません。遊びを学びと表現しましたが、全ての遊びが学びに繋がるわけでもありません。学びは脳に新たな情報回路が出来ることです。よりよくしたい思いが新たな課題に向かわせ、新たな情報回路が形成されます。学びが起こるには、学びが起きる環境構成の持続と発展が必要です。

そのような取り組みや、取り組める環境構成はにわかには出来ません。保育者たちの子どもや保育に対する思いや、専門職であるプライドが、絶え間ない自己教育を支えに可能となるのです。しかし、この思いが高まると、「分かってもらいたい」、「こんなに大切なことなのに」と相手に理解を求めすぎてしまいます。そこで、第三者に保育を体験してもらったり、保育実践を見てもらったりすることも、独りよがりになる危険性を回避できるのではないかと考えました。そこでコロナ禍で中断していた、保護者の保育体験や保育士体験を1月より復活させました。

また、秋には保護者アンケートを実施しました。寄せられた多くのご意見に耳を傾け、子ども達と保育者の思いや独創性、創造性の発揮により、こども達とともに保育を紡いできました。

幼児教育・保育の質を支える、園組織の在り方や保育の営みは、日々の検証こそが教育・保育の質を高め、実践を深めていきます。それを基に、「認定こども園協会」の自己評価ツールも使用し、報告を行います。

『自己評価実施の方法』

1. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく、「自己評価ワークシート」を用いて評価を実施した。
2. 11月の全体会議にて、全職員で事業計画の重点課題について振り返りをした。
3. 各部署で分担し、自立的な評価を行った結果を副主幹により取りまとめた。
4. 最終段階で園長と主幹が加わり、どうしてこのような評価になったかをまとめた。

『事業計画へ』

1. 評価後は計画につなげた。
2. 課題を絞り、重点課題を決めた。
3. 次年度のテーマ（動）を決めた。
4. 実行できる計画を内容に組み込んだ。
5. 計画を実行するために必要な研修を決定した。

1. 振り返りから次年度の研修計画立案へ

ミドルリーダーが、ファシリテートの学びを会議や研修の場で実践として活かすことで、意見を発信する風土が出来上がってきている。しかし、「子ども理解」の際に発達の視点で捉えていないために目の前に起きた事案への対応が改善策となりがちであり、子ども理解に至らないことも見えてきた。引き続き、話し合いの場では自ら課題に気付き、行動変容に繋がるような取り組みを行う。同時にミドルリーダー

は各々に合った問いかけが出来る力も養っていきたい。なぜなら、評価の観点である、子どもの発達段階がわかり、その子の良さを引き出せるような環境を作り出せたかという点において、双方向的コミュニケーションに重きを置いてしまい、気づきを促せない場面があったからである。場面に応じて伝達型も取り入れるなど改善すべき点が見えてきたからである。次年度も保育中の省察力を上げ、記録や情報を共有できる時間確保をして、環境構成や環境の再構成が出来る個々の保育力向上にも取り組む。

また、保育の基盤にしているシュタイナーの人間観を学ぶことは、園が目指す保育の軸を強固にするために必要となる為、園内研修や自主勉強会から、個々の学びへとつなげていくことができるよう育成内容を見直し実施していく。

2. 課題の振り返り

課題①「子ども理解」

○達成するための取り組み方法

「子ども理解」を共通の軸にした保育計画、会議や省察、公開保育、環境構成と教材研究

○到達の視点

子どもの発達段階がわかり、その子の興味関心のある姿を軸に、自分らしさを発揮できる環境や、好きなことに向かって探求できる場を作る

- ・振り返りと記録を通じ、喜びをもって、子どもの姿を他者と共有できたかどうか

- ・子ども理解が深まり、その子の課題や取り組みを提案できるようになったか
- ・環境構成、教材研究など、次へとつながる行動へと具体策を見出し、行動できたか
- ・子どものことを「語りたくなる」実感を持てたか

●取り組み1 「書式を用いた子ども理解」

子ども理解を深めるため成長記録や週日案の書式を用いて、保育を語り合い、記録を通じた保育や子どもの成長の観点を共有した。

○結果

振り返りと記録を通じ、子どもの姿を他者と共有する方法に、デザインマップ式書式を用いた。書式を通じて、計画の微調整やクラス内で共有に役立ち、子どもやクラスの状態に合った保育実践を行えた。子どもに体験させたいこと、そこから育つ力を共有することは、子ども達が「好きなことに向かって探求できる」環境づくりにつながった。また、振り返りの中で、子どもの姿を生き生き語る時間が増えた。

●取り組み2 「事務時間・ノンコンタクトタイムの確保」

子ども理解のため環境構成や環境の再構成が出来る個々の保育力向上。保育中の省察力を上げ、記録や情報を共有できる時間確保をした。

○結果

会議や研修時間等、年間計画で管理し、ノンコンタクトタイム(子どもの接しない保育業務)を作った。保育の振り返りや計画、記録作成を

行ったが、個々に仕事に必要な時間が異なり、効率的に使えない場面もあった。

○今後

保育者の専門性である、保育中の省察力向上のため、記録や情報を共有できる時間確保をしていく中で、「子ども理解」に基づく環境構成や環境の再構成が出来る個々の保育力向上に取り組む。

ICT化を進める中で、既存の発信ツールを見直し、保育アプリの変更をした。必要なことへ時間が使用できるよう運用を定着させる。

課題②「危機管理」

保育分野における危機管理を組織として築き上げ、各自の危機管理意識を向上させる。

○達成するための取り組み

- ・保育分野における危機とは何かを検証しつつ、知識技術力を向上させる。
- ・マニュアルやフローチャートをもとにした、訓練の実施。
- ・マニュアルやフローチャートをもとに、実際に動けたかどうか省察する。
- ・安心安全な環境整備を定期的に行い、環境を整備する。
- ・相模原市幼児教育・保育ガイドラインの理解と活用
- ・園外研修「保健衛生・安全対策」を受講し、受講者が最新情報を職員に周知する。

○達成の視点

- ・次へとつながる行動へと具体策を見出し、行動におこせたかどうか。

- ・作成したフローチャートが役立つものになっていたかどうか、係で最終的に検証。
- ・経験を記憶し、組織としての経験値をあげていく。

●取り組み1「各種マニュアル整備」

コロナ禍の感染対策を中心に、各種マニュアル整備を行った。「睡眠時無呼吸の対応」や「食事の誤嚥時の対応」「施設外保育の対応」等のフローチャートを追加作成した。フローチャートは各クラスに配布をし、緊急時にすぐに取り出せるようにした。

○結果

誰もが同じ対応をできるように作成したものの、評価の視点である次につながる行動につなげられず、また係での検証に至っていないため、活用しきれていない。今後はフローチャートを使用した内容を訓練に取り入れるなど、周知する方法を模索し、非常時に役立つものとして整備していく。

●取り組み2「保育環境の整備」

月1回実施

保育環境を整備することは子どもだけではなく、保育者自身の働く環境として必要なことである。定期的に係が中心となり、チェックリストを用いながら環境整備をおこなった。玩具の破



損や不足はないか、清潔が保たれ整理整頓されているか等を見る中で、気になった点を速やかに職員に周知し、改善が図れるようにした。

○結果

改善すべき環境があった場合に、速やかに対処できるよう作成した書式であったが、チェック項目や物品購入への流れなど、分かりにくかった点があった。そのため、書式は見直し、活用し始めているところである。

○今後

新人職員に対しても、保育整備の大切さを伝えていく。そのため、3年目までの保育者たちの声を中心に作成した「新人教育課程」の中にも環境整備が網羅されるよう見直しをした。特に、感染症処理の際に使用するバケツの使用方法については、入職後早々に伝えることなど、職員からの声が具体的な改善につながるよう、職員自身が保育環境を整えていることを重視して保育環境を整えていきたい。

課題③「働きがいのある職場づくり」

「保育の質とは何か、という問いを持ち続け、園が目指す保育の実現を目指す。働きやすさだけでなく、自分自身が満足できる働きができるような組織構築を課題とする」

○達成するための取り組み方法

ミドルリーダー（副主幹・指導教諭）が中心となり、仕事にやりがいを持てる職場の環境づくりをする。

- ・人材を育てる

- ・環境を整備する
- ・勤務時間の使い方を見直す
- ・ICT化

2022年度：人材育成者が実習担当者になり、実習担当者の育成

2023年度：実習指導者の育成

○取り組み「保育実習」

保育実習では、「新しい形の保育実習」として、都内養成校からの依頼を受け実践した。従来の記録とは異なり、実習担当者と実習生が“日のねらい”をもとにクラスの様子を振り返りながら、“翌日のねらい”へとつなげることで、実習担当者自身も保育の可視化・連動性のある保育をより意識することができた。

○結果

実習生にかかる時間の確保にはまだ課題が残るが、保育士の養成に寄与し、また寄与することが自身の学びや成長になっている実感を持てた。実習生と関わる時間の捻出には、依然課題は残る。養成は園全体での取り組みである風土を構築していきたい。

●取り組み1「園内研修」 41回/年

園外研修受講者が、自身の学びを園に持ち帰り、全体会議や園内研修において自分の言葉で学んだことや、保育の改善案を発信する場を設けた。

○結果

職員の中から研修者を担うようになり、研修者自身の目的、受講者の

目的を明確にした研修前の準備に、時間を要することに気付けた。研修内容の整理や資料作成を通じたこの時間は研修者自身の学び直しの機会となった。

○今後

3園での研修の見直しをし、園内研修の内容を厳選して、日々の振り返りの時間と記録作成の時間を確保することを重視した。

受講者の意識や考え方が行動へと直結するものでないため評価がしにくいものであるが、受講後の評価視点を明確にしていくことで、研修者、受講者共に、手応えを感じられるものに変えていきたい。

●取り組み2「勤務時間の使い方を見直す」

勤務時間内でノンコンタクトタイムを作り出すために、「職員の動き」の書式を作成し、一日の中で「振り返り」「記録」「休憩」等、をクラス内で可視化した。

また、各クラスの「一日の流れ」を再度作り直し、配慮事項にある伝承していきたい内容をもう一度捉え直し、他者の動きを可視化することで、時間が指示されたものでなく、職員が主体的に行動に移せるようにした。

さらに、保育アプリの業者を変更し、ICT化を生かして写真管理や電話連絡の時間軽減を図る使い方を見直した。

○結果

職員間で互いの動きがわかることで、振り返る時間が定着しつつある。記録の時間だけを確保するのではなく、この振り返りにて保育を振り返り、子どもの個々の育ちを捉えるやりとりが増えたことが、記録にかかる時間軽減につながっている。

保育アプリの変更においては進級時の手続きが無くなり、保護者負担軽減になったことも大きな利点であった。

○今後

時間確保は、組織として構築し、保育力をあげていくことで記録にかかる時間を削減できるようにする。

ICT化に関しては昨年度中から試験的に実施して4月を迎えたが、保育者が配信する際のネット環境が不十分であるため、今後は整備していきたい。保育記録に必要な写真を、撮影したその日のうちに不要なものを削除するなど、クラス内で時間を確保していくことが、仕事をためないこと、必要な写真をすぐに使える効率化を生み出していく。

業務内容の中で削減や縮小できる物はなにかを見極めていく。

3. 支援保育 研究・研修

月に1回「発達相談室」を実施した。定期的に心理士が来園し、子どもの行動観察をした上で保護者の相談を受ける為、信頼感に繋がっている。また、職員が同席することで、心理士が見ていない日常の具体的な場面の様子もその場で3者による共有ができた。

自園での発達検査の実施では、数値だけの検査結果だけでは見えてこない発達の凸凹さを心理士の所見から得ることができ、個別支援計画に反映できた。

事例報告会では取り組みをまとめる機会、取り組みに他者の視点を取り入れる機会となった。



4. 子育て広場

○園庭開放

今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、利用は予約制とした。天候が不安定な時も開放状況の問い合わせがあるなど、地域の保護者が子どもと過ごす場や安全に遊べる場を求めていることがわかった。「園児が声を掛けてくれて嬉しかった。」「我が子が夢中で遊んでいて、帰りたがらない。」など些細なコミュニケーションも家庭での育児から解放される瞬間である。利用する保護者からは我が子が園児と共に遊んでいる時間は“保護者同伴であっても”育児のストレス軽減になっていると実感できる。



在園児と遊ぶ環境は地域の保護者にとって、子どもとの関わり方や遊び方を知る機会であり、集団を体験する場になる。次年度も利用する未就園児が0～1歳児が多いことから、今後も園児の園庭利用の曜日に合わせて開放日を設定していく。

○講座「発達体操」

開催月 6月、7月/年2回

オムツ交換や抱っこの仕方など、日々の生活の中で子どもの発達を促す関わり方や遊び方を学んだ。参加職員にとっても感覚器官に働きかけ、発達を促せる動きを知識、技術と共に学ぶ機会となっている。午後の時

間を職員の研修として振り返りを行ない、講義を通して学びを補完している。



子育て広場
「発達体操」相模女子大学 トート・ガーボル教授

○講座「オルガネット演奏会」

感染症対策を取りながら実施した。毎年実施していることから、地域の方の中でも、開催を待ち望み、リピーターが多い。手回しオルガンは製作後継者がわずかであり、その音色を継続させていくことが大変な貴重な楽器である。地域の親子だけでなく、園児も楽しみにしている演奏会である。



子育て広場
「オルガネット演奏会」演奏者小島さん

5. 地域連携・その他

① 連携園保育園ナナとの連携

「モモとナナの連絡会」実施 年 12 回

○目的

『情報を共有し、保育の質を保つ』

互いの保育を通じて、園で大切にしていることや目指す方向性を確認しながら、具体的に改善する取り組みを決め、実践内容を決めていく。

○取り組み内容 交流や保育参観・ワーク

ナナの園児が遊び場として、モモの園庭やホール、屋上を利用する機会を多く持つことができた。また、モモからもナナの園庭に遊びに行く機会も設けた。互いに遊びの場を共有することで、連絡会におけるワークや振り返りで保育を見直す気づきが多くでた。「排泄」をテーマにしたワークでは、自園の保育を振り返り、課題を見出して具体的な取り組みへとつなげていく機会となった。



モモとナナの連絡会
グループごと協議した結果を報告

②その他

「自己評価」

自己評価を適切に行えるように、自己評価研修受講者を中心にツールを通じて評価をした。また、その結果と合わせて年間の事業計画を振り返り、代表者が課題を抽出して事業計画作成へと進めた。

「関係者評価」

○対象：保護者

実施時期：9月

方法：Googleフォームにてアンケートを実施

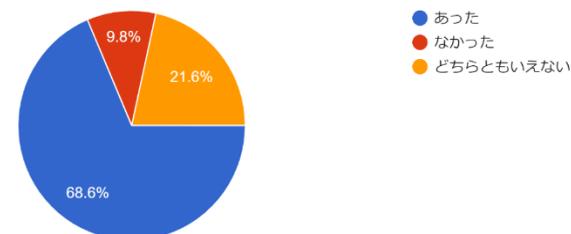
このアンケートには9月に開催した「こどもの日」の親子参加型の取り組みを含み、教育保育内容への理解や、園の危機管理や食育等についての取り組みを設問にした。

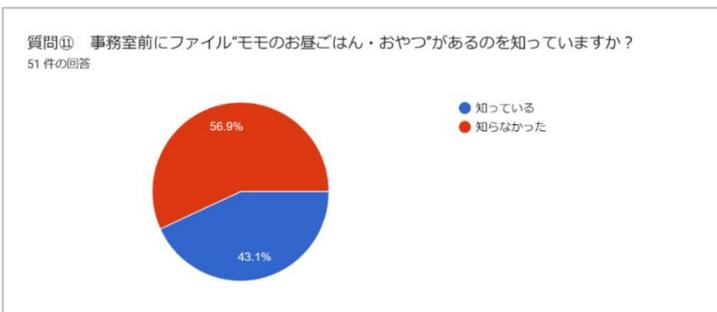
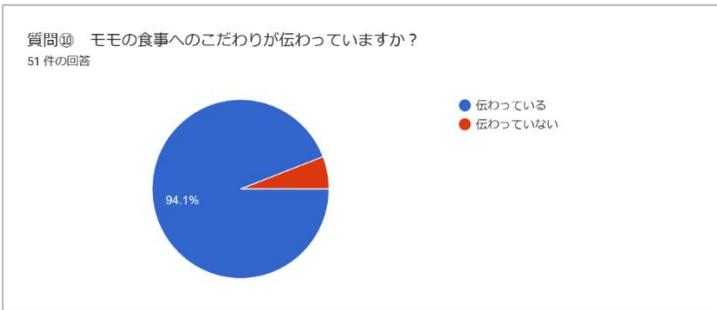
園からの回答を含む返答は、2回に分けて配信した。

※アンケートより一部抜粋

園の運営、教育保育の取り組みについて

質問① 園の日頃の保育や「こどもの日」等から...課題への取り組みを感じる場面はありましたか。
51件の回答





○保護者への給食アンケートにむけて

保護者へのアンケートを実施する前に Google フォームの使用に慣れる目的もあり、職員にアンケートを実施した。

昼食サンプルの展示は、日々廃棄するため、食品ロスの観点や夏場の衛生面を考えて廃止し、保育アプリにて写真付きでの配信に変更した。配信の認知度や、配信方法や内容の有効性を検証し改善点の材料にしていくことを目的とした。結果は、認知度や園の食事へのこだわりが十分に伝わっていないことが分かった。園内研修の課題も見えた。

9月に実施した保護者へのアンケートとは別に、アンケート実施を試みようとしている背景には食材を厳選し、子どもの心や身体にとって栄養のある食事を心がけている園のこだわりを伝えたり

子どもと園生活を話す機会にもなったりすると考えるからである。次年度はアンケートの目的を明確にし、保護者に向けたアンケート調査を実施する。



職員に向けた給食アンケートについて
厨房職員とクラス担任で結果を分析

○教育大会 研究発表

「非認知能力をささえる保育実践」

就学前の5歳児の取り組みをまとめ、報告をしたことも第三者評価となった。



Ⅱ 認定こども園ピノ

2022年度は「発達理解」と「多様性を受け入れる心」を重点課題に保育の質向上に取り組んできました。課題に取り組むにあたり、あらためて園が組織として目指す姿と求める保育者像は何かを考え、マネジメントにおいて「学び合う保育者の園をめざして」というテーマを掲げました。

「学びあう保育者の園を目指して」

保育者が安心して、子どもと同僚と思いを共有し、一緒になって心を動かす

↓

保育者が安心して、子どもを観察する視点を学び、子ども理解を深めていく

↓

保育者が、自分の関わり方に目を向け、それを他者とも共有する

↓

保育者が、見通しを持って保育するようになる

↓

保育者が、子どもと真に気持ちを共有できた手ごたえを感じる

↓

保育者が、自ら保育を創造し語ることにやりがいを持ち、園全体が多様性を受けとめる肯定的な見方で満たされる

↓

それが園の風土となり、保護者、地域へと伝わっていく

今年度は、新型コロナウイルスの影響も長引く中で、保育施設での様々な事案が立て続けに発生しました。園運営は社会情勢等を踏まえつつ、同時に自園が抱えてきた人材育成や人材確保の課題をも乗り越えていくために、「保育者が安心して、子どもと同僚と思いを共有し、一緒になって心を動かす」基盤づくりからスタートしました。

具体的には、ファシリテーターとなる指導者がクラスに入り、振り返りで保育の評価や改善の工夫を話し合う中で、職員間の相互理解・協働を深めていきました。今後も、自らの保育が変わることで子どもが育つという手ごたえをつかむまで、個々の専門性の向上と振り返り時間の確保や、子ども理解を深める話し合いの進め方が課題です。

園内研修は、実践での育成を目的とするOJTと、多様な意見を交わす中で生まれる同僚性・信頼関係の形成をねらいとする語り合い・グループワーク型の研修を重視し、共に学び合うチームを目指して人材育成に取り組みました。その結果、チームの中で起こる問題に、「自らが当事者である」という認識をもって主体的に取り組む保育者や、何気ない会話の中でも子どもの育ちについて語り合う保育者の姿が増えていきました。

感じたことを自ら考え、自ら行動することは、保育理念が目指す人間像でもあります。保育者に求められる専門性を一人ひとりが自覚し、責任と誇りをもって学び続けることができるよう、今後も研修等の学びの場や時間の確保等、適切なマネジメントに取り組んでいきます。

1. 2022 年度の重点課題と取り組み報告

課題①-1 発達理解

乳幼児期の「発達理解」と、一人ひとりが異なる存在である子どもを個として尊重する「子ども理解」は、保育者に求められる専門性であるとする。

保育は「子ども理解」が出発点となるが、「発達理解」が無ければ子どもを観察する視点が持てず、育つ力をつかみ取りながら適切な関わりを導き出すことはできない。その「発達理解」に課題を感じたため、園の全ての保育者による発達過程の作成に取り組んだ。

取り組み① 発達過程の作成

保育者は担当クラスの子どもの月齢に応じた発達過程を調べ、共通のシートに、生活と遊びにおける具体例と共に書き出した。最終的には、0～5歳児クラスの発達過程を1冊のファイルにまとめた。

「発達がわかれば保育がもっと面白くなる！シート」

取り組む中では、保育者が手を出し過ぎることで子どもの育ちの妨げになっていることに気づき、乳幼児期の発達を理解した上で、見通しを持って関わることの重要性が園全体で再認識された。

作成した発達過程のファイルは、子どもの対応や関わりに迷った時等に見られる場所へ配架し、発達に応じた関わりの目安として活用することを目的としているが、実践の質向上までに至っていない。今後は発達理解に基づく保育過程の作成に取り組み、発達の連続性に見通しをもった保育実践を目指す。

課題①-2 「発達理解」から「子ども理解」へ

発達理解を知識としてだけでなく、保育実践の質の向上につなげるために、年度の後半は「子ども理解」が重点的な取り組みとなった。

子ども理解は、一人ひとりの子どもと直接的に触れあう中で、子どもの言動や表情から思いを理解し、受け止め、かつその子の良さや可能性を発見する保育者のあたたかい「まなざし」によって深められていくものと思われる。また、保育者自身の解釈を入れずに子どもを観察し、子どもの願いを読み取る力が必要であると考え、日々の振り返りや保育の観察・記録を通して、事実から子ども理解が深まるようにOJTに取り組んだ。

取り組み① OJTで実践する保育の観察と記録

主に乳児クラスの担当保育者、新人保育者を中心に、他クラスの保育やモデルとなる指導者の保育を観察・記録する研修を行った。指導者と事前に観察の視点を確認し、観察後はその日のうちに対象となったクラスリーダー等も交えて振り返りを行なった。

記録には、子どもの姿と保育者の関わり、さらにその後の子どもの姿をつながりとして捉える表を用いて、保育者が子どもの思いをくみ取れていたか、子どもに寄り添った関わりであったかを客観的に評価することに取り組んだ。

観察と振り返りを通して、見る方も見られる方も、発達や子どもの特性に応じた多様な関わりを他者の実践から学び取る機会になった。

子どもの姿	保育者の関わり	子どもの姿
① 座り込んで遊ぶ	① 子どもの話を聴く	① 座り込んで遊ぶ
② 手を動かして遊ぶ	② 子どもの話を聴く	② 手を動かして遊ぶ
③ 手を動かして遊ぶ	③ 子どもの話を聴く	③ 手を動かして遊ぶ
④ 手を動かして遊ぶ	④ 子どもの話を聴く	④ 手を動かして遊ぶ
⑤ 手を動かして遊ぶ	⑤ 子どもの話を聴く	⑤ 手を動かして遊ぶ
⑥ 手を動かして遊ぶ	⑥ 子どもの話を聴く	⑥ 手を動かして遊ぶ
⑦ 手を動かして遊ぶ	⑦ 子どもの話を聴く	⑦ 手を動かして遊ぶ
⑧ 手を動かして遊ぶ	⑧ 子どもの話を聴く	⑧ 手を動かして遊ぶ
⑨ 手を動かして遊ぶ	⑨ 子どもの話を聴く	⑨ 手を動かして遊ぶ
⑩ 手を動かして遊ぶ	⑩ 子どもの話を聴く	⑩ 手を動かして遊ぶ

子どもの観察記録表

また、後進の指導においては言葉で伝えるだけでなく、育成者が一緒に保育に入りモデルを示すことでこそ伝わる部分が多いことも再認識した為、今後もOJTでの育成に力を入れていく。

園内公開保育は、保育経験や立場に関わらず園職員は誰もが参加できる。他クラスの保育を見て意見を交わす中で個々の気づきが共有され、公開保育を通して職員一人ひとりが主体的に考え発言する機会に繋がっている。さらには、保育の質を支える人材育成や組織風土などの園全体のマネジメントを振り返る機会でもある。

今後は、クラス担任が難しいと感じていることや困っていることをリーダー会議等で共有する場を作り、クラスの問題の背景には園全体の課題があると捉え、解決に努めていく。公開保育の取り組みは継続し、出来るだけ多くのクラスで実施することで、自分自身の保育の傾向や課題、良さへの気づきを保育の質向上につなげていきたい。



園内公開保育の様子



「問い」のボード

取り組み② 園内公開保育

2歳児クラスで園内公開保育を行なった。公開保育に向けて「問い」を立てるところから担任と育成者は対話を重ね、クラスの課題は何かを深めていった。公開保育では「問い」について参加者が視点をもって保育を観察し、気づきを付箋に書いていった。

公開保育後の協議では、環境構成や保育の展開の仕方など、クラス担任が困っていた部分について他の保育者から多くの意見やアドバイスがあった。多様な意見が交わされる中では、担任が課題と感じていた事とは異なる課題も見えてきた。また、保育者が子どもの主体性を尊重していると思って行ってきたことが、保育者の思いや理想に子どもを当てはめていたのではないかという気づきもあった。

課題2 多様性を受け入れる心

「多様性を受け入れる心」は、自分とは異なる意見や価値観を排除せず、多種多様な考えや個性を理解しようとする保育者の人間性を示している。支援保育の研修、自主勉強会、振り返りの時間など、多様な意見や考えに触れる場は、保育者が固定概念にとらわれることなく、相互理解を図りながら、良好な関係性と理念の目指す価値の認識につなげること

を目指し取り組んだ。対話を通して自己理解と他者理解を深め、相互尊重を実践した先に、真の意味で多様性を受け入れる心が園の風土となるよう、今後も人間性を磨き続ける取り組みを継続していく。

取り組み① 発達が気になる子の保育と支援

「摂食研修」

障害をもつ園児の発達に合った食事形態と介助に課題を感じ、専門機関から講師を招いて、基本的な「乳児期の摂食」についての園内研修を実施した。



園内研修「乳児期の摂食」

言語聴覚士による訪問指導では、実際に園児の食べる様子を見ながら障害特性に応じた食事の勧め方、介助の仕方、補助椅子の使用等、専門的な視点から具体的なアドバイスをもらうことができた。今後も多様な子どもを受け入れるにあたり、支援に関する専門的な研修は必須であり、専門機関との連携が必要不可欠である。

「保育の事例検討」

全体会議の中で、対象児の食事の様子を一定期間観察した記録をもとに事例検討を行った。事例発表を聞いて各自が気づいたことをグループワークで共有する際には、事前に支援に関する自主研修等を受講した職員が各グループに入り、個人の感想ではなく専門的な視点を持って話し合いが進むよう試みた。

事例では、保育教諭と厨房職員が連携をとり、対象児の発達やその時々の状態、状況に合わせた最善の関わりを模索しながら、気になる行動へ一貫性のある関わりをすることにより子どもの姿が変わっていくことが報告された。支援が必要な子どもに対して、保育者はすぐ気になる行動を止めるための方法を考えがちであるが、日々成長する子どもの姿をよく観察し、目に見える行動だけでなく背景にある子どもの思いや子どもの良さにまで目を向けることで、子ども自身の育つ力が十分に発揮され、行動変容していくことが事例を通して示されていた。

また、クラス担任だけではなく、厨房や事務職員等、職員全体で連携することで互いの専門性が最大限に発揮されることも実証され、次年度の重点課題「食に関する連携」につながっている。

情報共有の弱さは新たな課題であり、支援計画等の個々の子どもの特性や取り組みは進捗状況も含め可視化し、園全体で取り組んでいく。

「ケース会議」

支援が必要な子や気になる子のケース会議には、対象児に関わる職員が出来る限り参加をした。複数の保育者で行なうことで、子どもの事実を多く拾うことができ、一人の保育者では見えていなかった子どもの姿を捉え、思い込みや否定的な見方ではなく、子どもの思いを中心にした支援計画の作成につながった。

支援コーディネーターが実際に保育に入り、子どもとの関わり方のOJTも行なった。子どもにとって分かりやすい環境や保育者の関わりなど、保育が変わることで子どもが変わることを体感できるようOJTに努めた。

取り組み② 自主勉強会・読書会（昼）（夜）

自主勉強会は月1回（全12回）夜1時間程度開催した。

園で大切にしていること（集まり、誕生会、手仕事）や、感覚を養う遊び等の専門スキルを、体験を通して学ぶ場となっている。

読書会は月1回（昼）（夜）に開催し、子育て中の職員でも参加しやすい（昼）と、集中して語り合う（夜）で、それぞれに学べる環境を保障することができた。

園内で自主勉強会を開く事は、職員が主体的に学ぶきっかけや職員同士の交流が生まれる機会にもなっている。テーマは職員の意見を聞きながら決定し、参加者が意見や感想を交わすことで多様な考えや感性に触れることができた。持ち回りで進行役を務める事は、個々の技術や意識が高まるだけでなく、他の職員の刺激となり、学び合う保育者の実現を目指している。

夜に開催する自主勉強会は、子育て中の職員や短時間勤務の非常勤の参加が少なかったため、次年度は年6回に絞り、年間計画で日時を事前に伝えてさらに参加しやすい環境をつくる。

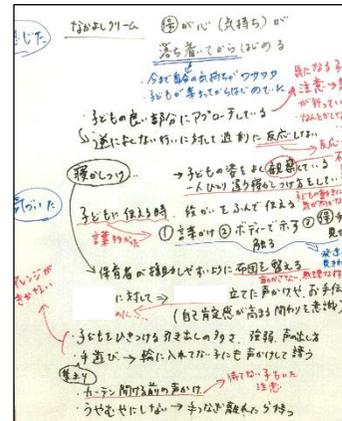
取り組み③ 語る場・振り返り

クラスの振り返りや会議はホワイトボードを使用し、グラフィッカーとなる人を立てて話し合いを可視化（板書）しながら進めた。またファシリテーターが入る事で、参加者全員が発言の機会をもち、かつ話し合いの視点がズレないように努めた。

複数担任がいるクラスで保育のズレに気付いた時は、その子にとって何が一番良いかという視点で話し合い、保育者間で統一した関わりを目指した。今日の保育の課題から改善点を見つけ、明日の保育へつながる振り返りのサイクルが生まれると共に、保育で大切に

していることを保育者自らが言葉で同僚や保護者に語る姿が増えてきている。

今後の課題としては、毎日の振り返りのみでは十分な時間がとれず、リーダー自らが保育の意図を言語化できなければ、話し合いの視点がぶれてしまう点である。引き続き指導者が入り、振り返り時間と



話しやすい場づくりをフォローしていく。また、時間確保のための業務の効率化（保育ICTの活用）や、クラス用ホワイトボード（みんなのボード）の確保、リーダー研修、ファシリテーターの育成による会議の活性化の課題は、次年度の計画につながっている。

ホワイトボードを活用し、振り返り・会議は板書しながら行う

取り組み④ 非常勤連絡会

期毎に非常勤のみで意見交換を行う時間を設けた。事前に話し合う内容を主幹の方で決め、付箋に書いて持ち寄ることで、限られた時間内で充実した話し合いが持てた。また、短時間勤務やフリーの非常勤など、クラスの振り返りや会議、研修に参加する機会が少なくなりがちであった職員も、シフト調整することで全員が参加可能となった。

連絡会では、主に保育での困り感や働き方への意見があり、日頃の振り返りでは聞く時間や確認ができていない課題に気づいた。非常勤の視点からの様々な意見や提案は、情報共有ノートの活用や有休

のとり方等、保育の工夫や働きやすい職場環境の改善につながった。また、非常勤一人ひとりの保育に対する意識やスキルアップへの意欲を高める事にもつながり、次年度は非常勤も個人目標のフィードバック面談を実施することとなった。

2. 子育ての支援

子育て広場「ゆったりこ」

今年度も感染対策のため、参加者には検温と健康チェックを実施した。年度当初は参加者が少なめであったが、6月頃からは毎回キャンセル待ちが出るほどになり、コロナ禍で外部との関わりが少なくなっていた子育て保護者にとって、対面で交流できる広場はとても好評であった。

広場では、身近な素材で出来る玩具づくりや親子でのふれあい遊びを紹介した。参加者は体験を楽しみながら会話が弾み、子どもの遊ぶ様子を見て安心し、喜びを感じられる方もいた。

また、日々の子育てやコロナ禍の閉塞感から解放されてゆっくりと過ごせる空間を演出した中で、個々の子育ての悩みや相談に対して気軽に園職員や講師と話し合える時間を設けた。参加者アンケートでは「楽しかった」「家でもやってみたい」「他の参加者と話すことができ楽しく過ごせた」などの声が多く寄せられ、リピーターとなって毎回参加する方が増えていった。

年度途中からは入園見学の方に声を掛け、新規の利用者を募るようにした。次年度は月齢ごとに開催時間を分ける等の工夫を試み、利用者拡大を図る。



毎月開催の子育て広場「ゆったりこ」

子育て講座では、ベビーマッサージ、発達体操、オルガネット演奏会を開催した。ベビーマッサージでは、講師より「お母さんが気持ちが良いと赤ちゃんも気持ちが良い」という助言を頂き、参加者は目を瞑りリラックスしながら身体をゆるめ、子どもと一緒にゆったりとした時間を過ごしていた。

発達体操では、発達に合った遊び方や関わりのポイントを講師から実技で学び、参加者からは「勉強になった」「家庭でも取り組みたい」という声が多く寄せられた。オルガネット演奏会では、希少な手回しオル



子育て講座「発達体操」年2回実施

ガンの心地の良い音色を聞きながらゆったりとした時間を過ごしていただくことができ、それぞれの講座の目的を達成することができた。

今後も地域の方のふれあいの場づくりと園の専門性や資源を生かした子育ての支援を継続して行く。

3. 自己評価と保護者アンケート

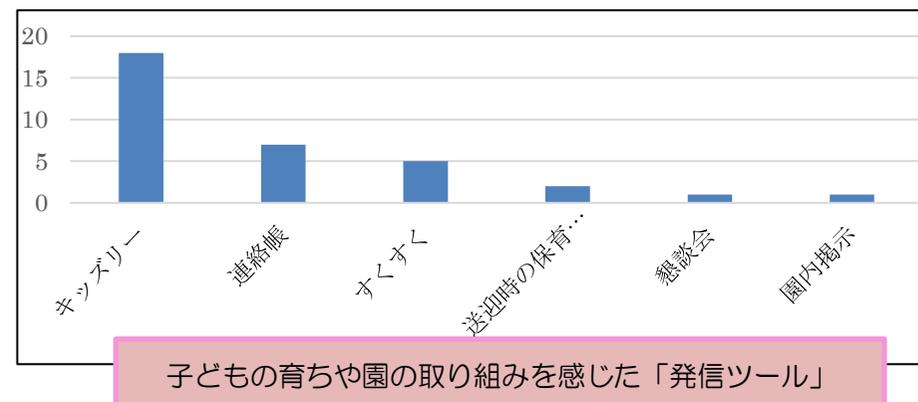
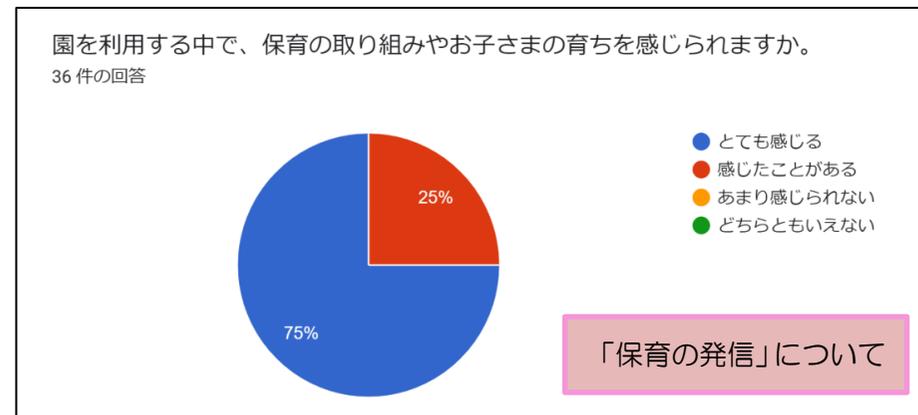
9月に保育の可視化展「ピノのこども日」を開催し、合せてグーグルフォームでの保護者アンケートを実施した。

＜アンケート項目＞

- 1 こどもの日について
- 2 重点課題について
- 3 保育の発信
- 4 保育環境（理念・方針）
- 5 危機管理
- 6 食育
- 7 その他

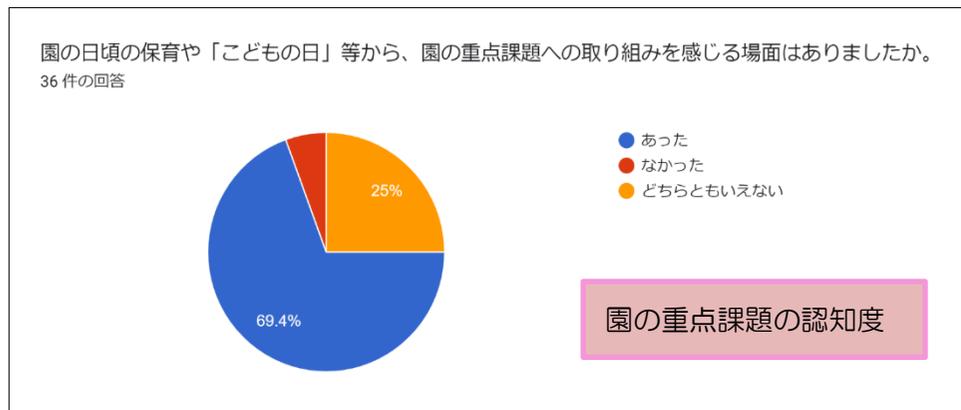
63 家庭中 36 家庭より回答があり（回答率 57%）保護者の視点から園の取り組みや運営に関するご意見が数多く寄せられた。

アンケート結果は項目ごとにまとめ、意見・質問への回答と共に保護者へ公表し、アンケート結果から抽出された課題は、次年度の計画に反映させると共に、園の自己評価とともに課題を整理して今後の取り組みを検討した。



多様な家庭環境への配慮や、子どもの育ちについて保護者と相互理解を深めること等、取り組みの強化が必要な課題も見え、年度途中で「排泄の自立」「応答的な連絡帳の書き方」について、保護者支援に関する園内研修を追加で実施した。

今後も園の目指す社会の実現に向けて、アンケート等の関係者評価や公開保育を通じて園の教育保育の取り組みの発信、共有に努めていく。



Ⅲ 保育園ナナ

2022年度は、0歳児6名定員のところ、1名入所という運営上かなり厳しい状況からのスタートとなりました。少子化が進む中、2歳児までの入所施設である小規模園は、ますます園児の確保が難しくなっています。産まれてから3歳までの育ちは、これから生きていく上での心と体の土台作りがなされる大切な時期です。この時期にどんな人と出会い、関わり、どのような環境で豊かな経験を積み重ねるのかによって子どもの育ちは大きく変わり、その責任はとても重要です。そのため保育者は、その責任を担うため、更なる保育の質と専門性が求められ、その自覚をもって努めなければなりません。私たち保育者は、子どもたちの愛らしさに惹かれ、夢を抱きこの仕事を選んでいました。子どもたちが夢を抱き、明るい未来に希望を持って歩んでいかれるように全力でサポートしていきたいと強く思っています。

以下の文面は、相模原市幼児教育・保育ガイドラインに示されています。

～相模原市子ども・子育て会議が考える「夢」とは～

「夢」とは、将来の職業やなりたい姿というものだけを意味するものではなく、子どもが日々の遊びや生活の中で持つ「やってみたい」、「できるようになりたい」等の思いも「夢」のひとつと考えました。そのためには、まずは一人一人の子どもが認められ、尊重され、愛されているという実感を積み重ねていくことが重要です。私たちは、それを守り、支えられるような大人でありたいと思います。

このガイドラインは、子どもを取り巻く保育者、保護者、地域、行政

の四者が話し合って策定されたものです。四者には、それぞれ役割があります。

保育者の役割とは…※相模原市幼児教育・保育ガイドラインより抜粋

- 子ども一人一人の発達を理解し寄り添うなど、共感のまなざしで教育・保育に取り組む。
- 子どもにも保護者にも居心地が良く、訪れやすくするなど、より良い教育・保育の環境づくりに努める。
- 日頃の教育・保育のさらなる質の向上を目指す。
- 保護者との信頼関係を基礎に子育てを支援し、専門性を生かした子育ての良き支援者となる。

保育施設としての役割を担うために保護者、地域、行政と協力し、当園で毎年掲げる重点課題に全職員で取り組みながら、子育てを支えていきたいと思えます。

1. 課題の振り返り

2022年度の課題

課題 1

「子ども理解のための語り合い」～ひとり一人の発達理解を深める～

・クラスの振り返りに時間をかけて、一人ひとりの子どもの育ちについて話し合いを重ねていった。クラス内での共有はしてきたが、ワンフロアであるナナでの保育環境からすると、異年齢で過ごす時間も長く、早朝・延長担当を含め、全職員での子どもの育ちの共有と連携がとても重要となり、その難しさが感じられた。どこでどのようにその時間を確保するか、

工夫をしながら今もなお取り組んでいる。

○達成の視点より

①毎日子どもたち夢中になって遊びこめる環境作りができていたか。

→数名の職員が、連携施設認定こども園モモでの発達体操に参加し、講師であるトート先生から学び得た遊びを積極的に取り入れていった。じっくりと子どもの発達に合った遊びができるように、年齢ごとに遊びの空間を分け、時間や場所を考慮し、必要な物を購入したり、作成をしたりしていった。互いに、どのような設定をしているかを見ることにより、自分のクラスの発達に合った設定にアレンジしたり、危険予測の視点からアドバイスをしたりする等、それぞれが工夫して取り組むことができたことは良かった。



トート先生の発達体操



トート先生の発達体操の実践



②子どもの育ちについて語り合う中で、明日への保育の充実と楽しさが得られたか。

→クラス内だけでなく、早朝・延長担当者での振り返りや研修ができる時間を少しずつ確保していった。付箋を用いて共有する方法も取り入れてみたが、やはりクラスを超えて話す機会を作ると、それぞれの悩みや疑問点、意見が出てきた。クラス担任と朝夕担当者で、それぞれの活動時間の様子を伝え合うことで、子どもたちの今の姿を共有するよい機会となった。遊びだけでなく、睡眠や排泄の部分についても情報共有ができ、生活のリズムや排泄の自立に向けての取り組みに役立っている。互いに意見を出し合い、話し合うことで、子どもたちが心地よく過ごせている様子が伺えると、保育者側も安心し、充実感を得られていたのではないかと思う。



押し車・段ボールハウス作成

③自らの保育について自分の言葉で語る事ができたかどうか。

→毎月配信される森のこびと通信、保育アプリ、連絡帳、懇談会、「ナナの日」(保護者参加の行事)HP等、自分の言葉で語る機会はたくさんある。その中でも、保育アプリでの配信を積極的に行ってきた。

写真も一緒に投稿するため、今年度行った保護者アンケートより、保護者の方々が毎日楽しみにしてくださっていることがわかった。日々の様子は伝えられたが、どんな目的で、何を大切にしながら保育に取り組んでいるかという観点では、重点課題について園の取り組みが十分に伝えられていなかった為、語るという点においては、不十分であった。保育の可視化をどのように行っていくかは、次年度も課題となる。



工夫を凝らした粗大あそび

・認定こども園モモとの連携について

昨年度より発足したモモナナ連絡会では、モモとナナの保育の質を保つために、担当者が定期的に保育内容や子どもの育ちについて話し合いを重ねていった。昨年までは、コロナ禍で子ども同士の交流機会が持てなかった為、今年度は、交流日をクラスごとに、曜日や時間を具体的に決め、進めていった。頻繁にモモへ足を運び、園庭や屋上で遊んだり、散歩先で合流したりするなど、交流する時間を多くもつことができた。3歳からモモへ入園する子どもたちは、モモで遊ぶ機会がたくさん持てた為、モモへ行くことを楽しみに過ごしている様子が伺えた。

また、モモでの保育参加を希望する職員が、1日モモで保育をして過ごすことで、多くの気づきがあり、モモとの連続性のある保育の実践に向けて改善策を見出し、取り組んでいる。次年度も継続してすすめていきたい。



皆大好きな築山遊び



広い屋上



ナナにはない長い階段上り



モモの築山を再現しようと大きなマット用いて作りました。

・オリーブナナとの交流

オリーブナナはサービス型高齢者住宅ということもあって、コロナ禍での感染リスクの高い高齢者との交流は難しく、合同避難訓練や時折写真や子どもと作ったものを掲示する等の間接的な関わりしかできていない。ただ、オリーブナナの利用者の方が外出の際は、いつも園外から声を掛けてくださったり、子どもたちから「こんにちは」「ばいばい」と手を振ったりと自然にやりとりをしている姿が見られた。毎日庭で遊んでいる子どもたちに興味を持ってくださり、数名の利用者の方から「いつも上から見ています。かわいらしいですね」「先生方いつもとても丁寧に関わっていらっしゃるんですね」等、嬉しいお言葉をいただけ、とても励みになった。何か特別にしなくても、言葉を交わしたり、笑顔で挨拶をしたりすること

で、互いにコミュニケーションがとれ、色々な方と出会い、関わる機会が持てるのだと感じた。大切なのは、私たち保育者が積極的に挨拶をしたり、言葉を交わしたりすることだと改めて気づかされる。オリーブナナの方だけでなく、地域の方に助けられながら園の運営がなされていることを実感する一年となった。

課題2 「園児の確保」

- ・今年度は、0歳児6名定員のところ1名スタートとなる。開園以来初めてのことであり、職員の確保をしていたが、運営的には厳しい状況となる。産休に入る職員がいた為、職員体制を鑑み、少しずつ0歳児の募集を行い、9月に定員を満たす。

○確認の方法

- ・子育て広場参加人数が増えたかどうか
⇒参加人数は、毎月2家庭の参加から3~4家庭の参加に増え、参加者同士が顔見知りとなり、とても良い交流の場となっていた。
- ・定員を満たしたかどうか
⇒R5年度の新入園児は、4名。0歳児クラスの入所者数は、昨年と比べて1名増えたが、4名の定員割れとなる。結果としては、昨年とあまり変わらない状況となった。
- ・入所見学者の入園人数
⇒R3年度は、38名であったが、R4年度は42名。見学者数は増えた。

入所希望年齢
 0歳児…24名
 1歳児…17名
 2歳児…1名

見学者対応月人数
 7月・10月…7名ずつ
 6月 …5名

例年夏ころまでに定員を満たすため、6.7月に見学者が集中していた。また、次年度の入所申請が11月である為、10月も集中して増えていることが分かった。

この結果を踏まえて、秋頃までに入所希望者対象の説明会やイベントを開催し、園の広報活動に力を入れていく必要がある。一番良いのは、当園をアピールする場として、9月にある法人での行事カシオペア祭と同日に開催される、「ナナのこども日」に一般公開することである。多くの地域の方に足を運んでいただけるようにすすめていきたい。

2. 地域子育て支援

・「ナナであそぼう」

目的：地域に開かれた子育て支援の実施と専門性を活かした子育て支援を積極的に行うよう努める。特に、預かる対象年齢が「0歳から2歳児」である為、同じ年齢での子育てに悩んでいる方の助けになるよう取り組む。

⇒前項にあるように、リピーターが多く、参加者は少しずつ増えている。ご感想の中に、「モモ・ピノ・ナナの子育て広場は、他の園と違って、子どもを遊ばせる場だけでなく、保護者が手仕事をしたりできるので、とても嬉しいで」という声を聞くことができた。保護者の方も楽しめる時間として参加くださっているようだった。子育てする上で、保護者の方の心と体が元気であることがとても大事なことであり、地域の方の子育て支援に少しでも助けになっていることが実感できる一年となった。次年度は、宣伝効果をあげて、園庭開放も取り入れていく予定である。



～ナナであそぼう～
 ベビーマッサージ・芋ほり
 人形劇・手仕事等

